

# コミュニティ ソーシャルワーク

実践  
事例集

「地域福祉力」の向上を目指して



# 目次

---

はじめに	1
コミュニティソーシャルワークとは	2
統計情報など	3
<b>クローズアップ・事例 1</b> (施設CSW) 地域のネットワークを活用したゴミ屋敷・多問題家族への支援	4
<b>クローズアップ・事例 2</b> (社協CSW) 住民参加型在宅福祉サービスを活用した引きこもりの方への支援	6
<b>クローズアップ・事例 3</b> (社協CSW) 地域のサポート体制構築による障がい者の方の自立支援	8
<b>事例 4</b> (社協CSW) 地域のネットワークを活用した多問題家族への支援	10
<b>事例 5</b> (社協CSW) 地域のネットワークを活用したホームレス支援	11
<b>事例 6</b> (社協CSW) 1人暮らしの認知症の方が地域で暮らすための支援	12
<b>事例 7</b> (施設CSW) 39年間の引きこもりの方への支援	13
<b>事例 8</b> (社協CSW) 20年間の引きこもり生活から企業への就職支援	14
<b>事例 9</b> (社協CSW) 地域の見守りネットワークを中心とした支援	15
<b>事例 10</b> (施設CSW) 医療・家族会との連携による高次脳機能障害の方への支援	16
<b>事例 11</b> (社協CSW) 地域住民を巻き込め!～ゴミ屋敷は都会の問題じゃなかった～	17
編集後記	18

## はじめに

---

平成17年から島根県社協の主催で「コミュニティソーシャルワーカー（CSW）養成研修」が実施され、平成26年度までに293名のCSWが誕生しています。

コミュニティソーシャルワークとは、地域において生活上の課題を抱える個人や家族に対する“個別支援”と、それらの人々が暮らす生活環境の整備や住民の組織化等の“地域支援”をチームアプローチによって統合的に展開・実践する援助技術であり、その中心になるのがCSWです。そして、近年、CSWは生活のしづらさを解決していくための専門職として期待されています。

CSWは「制度・サービス・財源がない」中で、制度の狭間の問題に向き合い、多種多様な機関との連携や調整、サポートネットワークの仕組みを作りながら、必要なサービスや社会資源を開発していくのですが、もちろん、それは簡単なことではなく、絶えず高度な知識や技術の研鑽が求められます。

そこで、平成20年3月、CSW養成研修会の修了者による自主組織として「コミュニティソーシャルワーク実践研究会」を設立しました。

この研究会は、コミュニティソーシャルワークの視点と、援助技術の向上、地域資源を創設していく必要性等について学ぶとともに、横のつながりづくり、情報・意見交換の場、困ったときに相談できる場としての一翼を担っています。私はここで仲間と出会い、学びあいの中で元気をもらい、「また明日から頑張ろう」と思える場所になっています。

実践には、各地で活躍するCSWの実践知を学びあうことが必要であり、今回の事例集発刊となりました。

皆さんが日々行っている活動をご紹介することで、日々奮闘している仲間の思いにふれ、実践知を学ぶとともに事例検討を行うなど活きた事例集となるよう活用いただくことが願いです。困ったり悩んだりした時には、気軽に相談できる仲間がいることも心の片隅に、より豊かなCSW活動としていただければ幸いです。

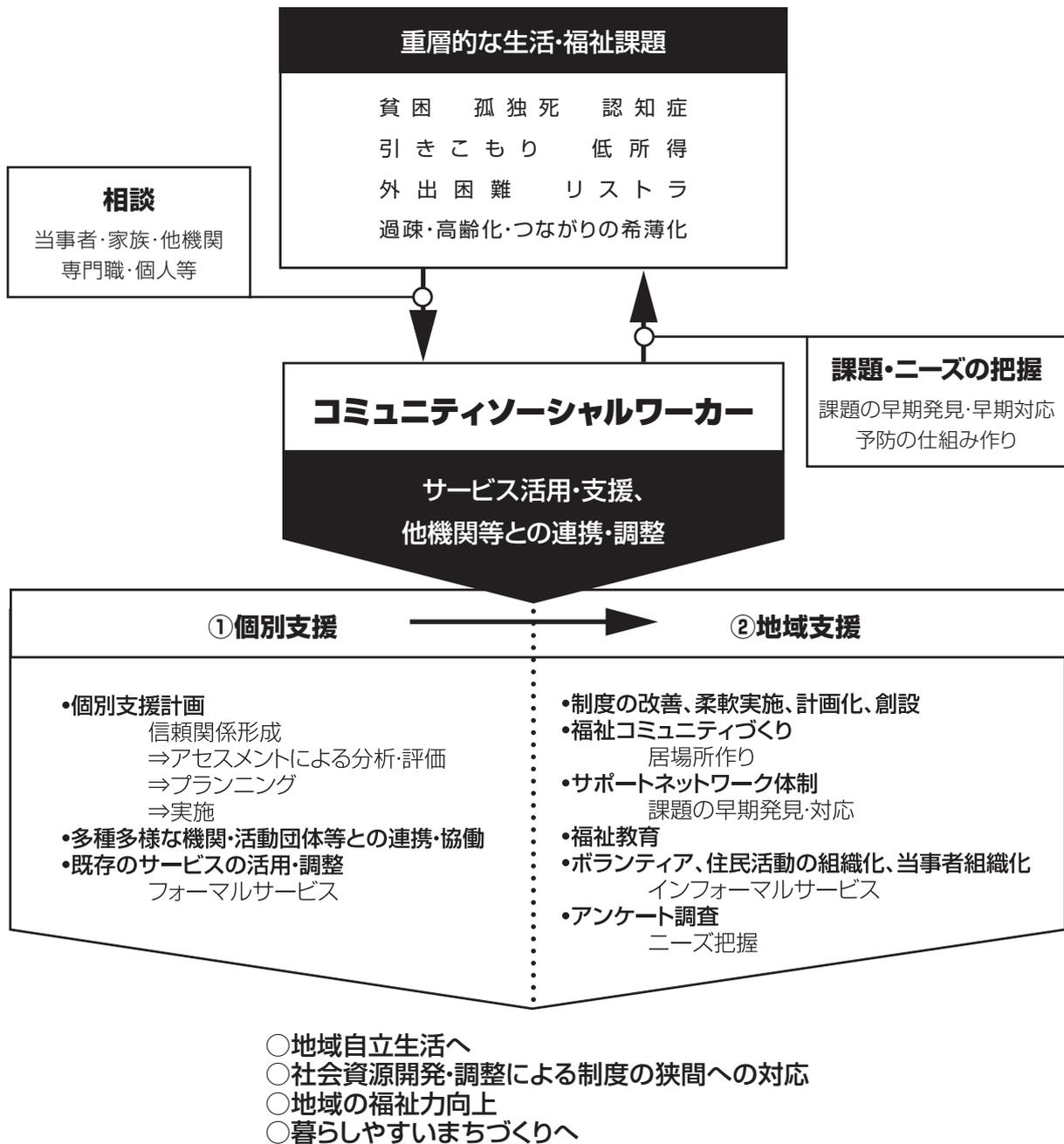
最後に、事例の提供をいただいた皆さん、この会の発展にご尽力いただいているすべての皆様に心からお礼を申し上げます。

平成27年3月  
しまねコミュニティソーシャルワーク実践研究会  
代表幹事 向原 仙子

# コミュニティソーシャルワークとは

コミュニティソーシャルワークとは、様々な福祉施設・機関・団体において、地域福祉活動を担当するワーカーが、従来の分野別、対象別のアプローチではなく、サービスを横断的に活用し、地域におけるサポートネットワークを形成しながら、地域の様々な生活課題を的確に把握し、その要因を分析・評価し、適切なサービスへ結びつけるとともに、個別の生活課題を地域で支えあう地域生活支援ネットワークを構築したり、必要に応じたインフォーマルサービスの開発などを行う支援活動です。

## CSWの展開イメージ



## 統計情報など

### ●島根県CSW実践者養成研修および基礎研修修了者

年	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26
人数	31	27	33	31	29	27	29	28	26	32

合計 293名(うち県外2名)

### ●CSW実践研究会

会員71名 賛助会員9名 80名(社協72名、施設4名、包括3名、大学関係者1名)

### ●島根県内CSW実践者養成研修、CSW実践基礎研修修了者 市町村、業種別統計

	市町村	社協	包括	行政	施設	合計
1	松江市	32	16	0	27	75
2	浜田市	14	0	0	0	14
3	出雲市	26	18	0	8	52
4	益田市	7	2	0	9	18
5	大田市	5	4	1	5	15
6	安来市	4	3	1	7	15
7	江津市	3	0	0	3	6
8	雲南市	27	3	0	3	33
9	奥出雲町	3	1	0	1	5
10	飯南町	9	1	0	0	10
11	川本町	2	0	0	0	2
12	美郷町	2	0	0	1	3
13	邑南町	7	0	0	3	10
14	津和野町	3	1	0	0	4
15	吉賀町	5	1	0	1	7
16	海士町	5	1	0	1	7
17	西ノ島町	6	1	0	0	7
18	知夫村	2	0	0	0	2
19	隠岐の島町	5	0	0	1	6
	島根県合計	167	52	2	70	291
	他県	0	1	0	1	2
	合計	167	53	2	71	293

## 事例 1 (施設CSW)

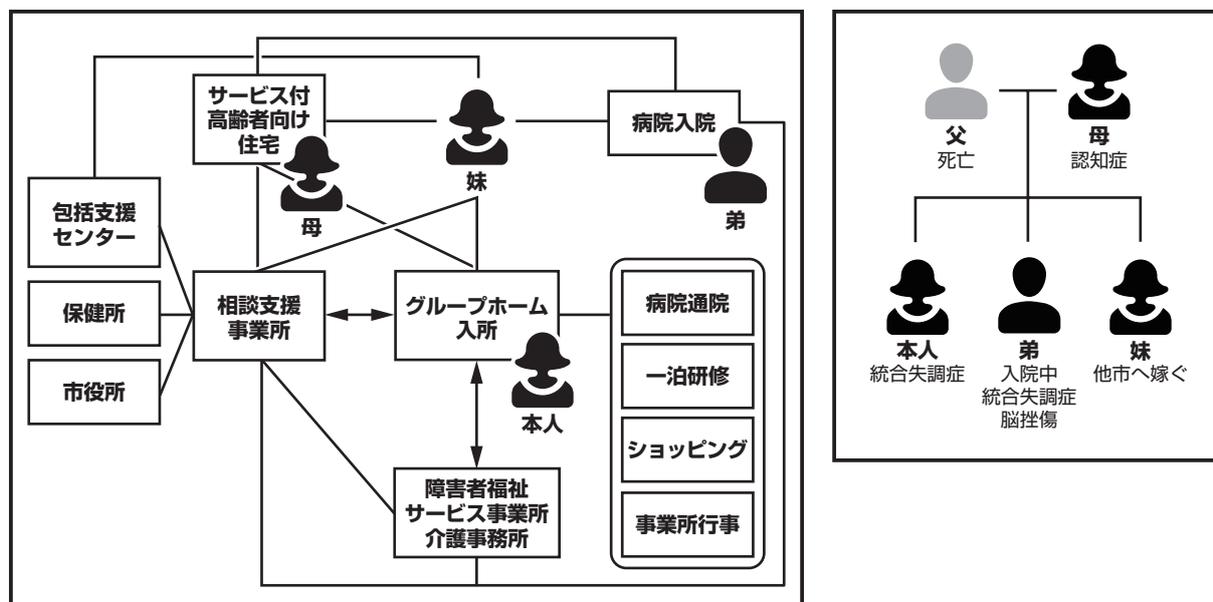
# 地域のネットワークを活用した ゴミ屋敷・多問題家族への支援

## 事例概要

高校在学中の16歳の時統合失調症を発症。入退院を繰り返しながら何とか卒業したが、その後は1回アルバイトをした程度でずっと家で過ごしていた。57歳の時に医療保護入院となり、退院をきっかけにサポートセンターが関わるようになった。弟も統合失調症で本人の薬を取って飲んだり、認知症の母親が腐ったものを食卓に出すが誰もそれを拒まず食べているような生活をしてきた。

父親が亡くなった後、弟が浣腸依存とパチンコ依存になり医療保護入院となった。車を運転できるのが、弟のみだったので、山間の田舎での生活を継続することが出来なくなった。弟は金銭管理が出来ず多額の借金を繰り返した為、妹が後見人になっている。母親、本人共に生活力がなく、家はゴミ屋敷で虫が飛んでいる状態、鼠が浮かんでいるバケツに餅を入れて食べようとするなど、生活は破綻していた。しかし、両者ともに病識がなく、誰の意見も聞き入れることが出来ず、在宅にサービスを開始したが、勝手に断るような状態だった。

本人には現実感がなく妄想の世界に入っており、母親は認知症の為、悲惨な生活を子どもたちに強いている状況。その為、妹が1人で3人を見ていたが、心身ともに疲れ果て、助けてほしいと相談に来所された。



## CSWとしての働きかけ

### 潜在的な生活・福祉課題の発掘

- 本人だけでなく、家族全体を対象に、支援を検討した。

### 地域のネットワークを活用

- 母親・本人・弟が清潔で快適な生活が送れるようそれぞれの支援体制について検討した。

### その他

- 妄想がひどく現実感がないが、ふいとした時に発する本人らしさや本人の好きなことをくみ取り、支援を検討した。

自分の居場所だと思えるような本人の好きなものを居室におき、居心地の良い空間を作った。

## 成果・課題

---

病識がなく、長年3人で破綻した生活を送っていた為、3者が依存し合わないよう、環境を調整した。母親は、介護保険での対応、本人はグループホームへの入所、生活訓練事業所へ通所、弟は医療保護入院で治療となった。

生活訓練事業所では、得意な編み物や作業に積極的に取り組むことで、周囲に評価され自分の存在意義を実感することができた。このことが自己肯定感を持つことにつながった。グループホームで他の利用者と楽しく会話しながら食事を摂ること、困った時に相談できる仲間を作ることもできた。

一方、弟が病院から再三電話をしており、本人を惑わすようなことを言う為、その都度振り回されている。父親が亡くなったことを理解できておらず、家族4人で生活することを希望しておられて、何かあるとすぐに家に帰ろうとされる。母親、本人、弟の金銭管理や福祉サービスのこと、家の管理のことなどすべてを妹が背負っており、それぞれに病識がない為責められることに妹が疲弊していることなどは今後の課題である。

### CSWになったきっかけ

地域住民の方々は、よりよい人生を送りたいと誰しもが思っておられるはずです。それをサポートする側が、高齢者福祉や障がい者福祉に関しても、まだまだ上から目線の状態が多いということを感じています。同じ目線に立ちながら地域の方と一緒に考えていく社会でありたいと思っている時に、CSWの勉強会があり、それに参加させていただいたのがきっかけです。

### 良かったと思うこと

問題をかかえておられる方々の人生を良くしていく上において、法律や制度の範囲内での動きではなく、それをどう運用するかを考え、現状に合った形に変えていくことさえ出来るという重要な役割があると思いますので、CSWになれて良かったと思います。

### 今後の目標

様々な施設や機関がそれぞれに縦割りで動くのではなく、連携を密にして生きたネットワークづくりをすすめたいと思います。それが機能することによって地域の中で暮らしておられる高齢者や障がい者の方々が、「生きててよかったなあ」と思えるような支援体制を整えられればと思います。

### 本格的な活動を目指す方への一言

福祉における地域づくりに貢献できる人材を育てることに協力したいと思います。所属機関においての完結型の活動ではなく、地域全体のサポートを目指す人材となっただけであればと思います。

## 事例 2 (社協CSW)

# 住民参加型在宅福祉サービスを活用した 引きこもりの方への支援

## 事例概要

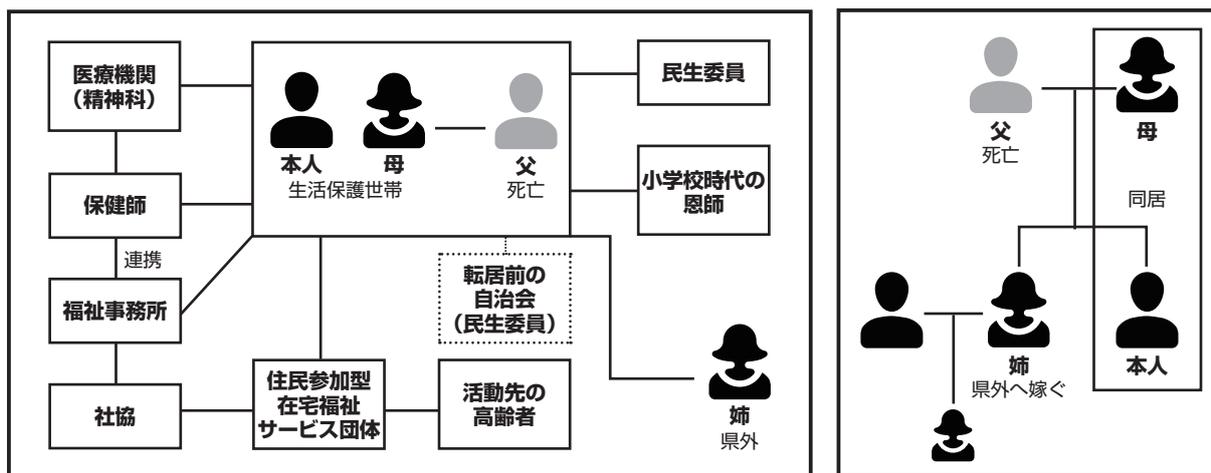
40歳代男性、母親と2人暮らし、生活保護世帯（主な収入は母年金）。

おとなしく、まじめで、几帳面な性格であるがゆえに人間関係が上手く築けず、引きこもりになっている。一度は県外で就職したが、長くは続かず、帰省してからは仕事に就くことができず、母親の年金と生活保護費で生活している。外出は、買物と通院程度。子どもの頃から足が速かったこともあり、地区の運動会には、民生委員の誘いで参加したこともあるが、家の老朽化により、町内の他地区へ転居を余儀なくされる。

特に問題行動等があるわけではないが、社会との接点がありません。今後の自立した生活に向けて支援が必要となっていたため、福祉事務所からの依頼で関わりを持つようになる。

几帳面な性格で手先が器用なため、色紙を使った貼り絵が得意。その作品を社協に展示したり、独居高齢者を対象としたはがきボランティア（安否確認等を目的として年に4回お便りを送付）にも協力してもらっている。以前は、写真に興味があり、撮影した写真を社協の広報誌でも使用したことがある。

また、社会参加と就労へのきっかけとして、住民参加型在宅福祉サービスの協力会員として高齢者宅の草取りや墓掃除を定期的に行ってもらっている。



## CSWとしての働きかけ

### 地域のネットワークを活用

○引きこもりの方が、住民参加型在宅福祉サービス団体への加入されたことにより、他の協力会員や利用者とのつながりができた。また、活動の継続により、社会の一員として役割を担っているという実感が持てるようになり、サービスの担い手として活躍されるようになった。

## 成果・課題

---

草取りなどの作業を丁寧に行われるため、利用者の方からは、とても信頼されている。丁寧な活動が少しずつ口コミで広がり、最近では、本人を指名されることもある。

少しずつ社会参加できるようになってきているが、引越しをされたということもあり、地域とのつながりはあまりできていない。民生委員には定期的に訪問してもらっているが、自治会等との連携不足により地域行事への参加等には至っていない。

今後は、同様のひきこもりのケースや障がい者の方への自立支援を目的として、住民参加型在宅福祉サービスを社会参加のきっかけとなるような形で展開していきたい。

### CSWになったきっかけ

最初のきっかけは、コミュニティソーシャルワークの研修会を受講したことです。

地域福祉推進のため福祉活動を行ってきましたが、住民個別の課題や日々の対応に追われ、地域全体の課題解決に向けた取り組みができていないことへのもどかしさを感じていました。そんな時にコミュニティソーシャルワークの研修会を受講し、個別支援から地域支援へという考え方や手法を学んだことで、ステップアップすることができたのではないかと思います。

---

### 良かったと思うこと

コミュニティソーシャルワークの手法を学んだことで視野が広がり、また、福祉課題に対するアプローチの方法や視点が変わり、地域福祉を推進する担い手としての役割を改めて認識することができました。

また、コミュニティソーシャルワーク実践研究会の仲間と同じような悩みや情報を共有することでスキルアップできる機会を得ることができました。

---

### 今後の目標

個別の生活課題の解決に向けて丁寧に寄り添いながら支援していくとともに、地域全体にも目を向け、新たなサービスや仕組みづくりを行い、自分らしく安心して暮らせる福祉のまちづくりを進めたいと思います。

---

### 本格的な活動を目指す方への一言

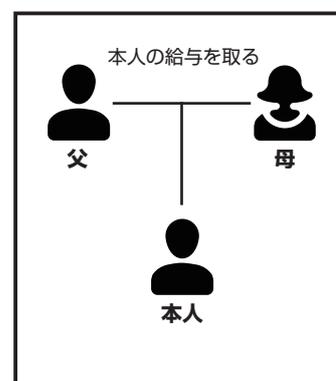
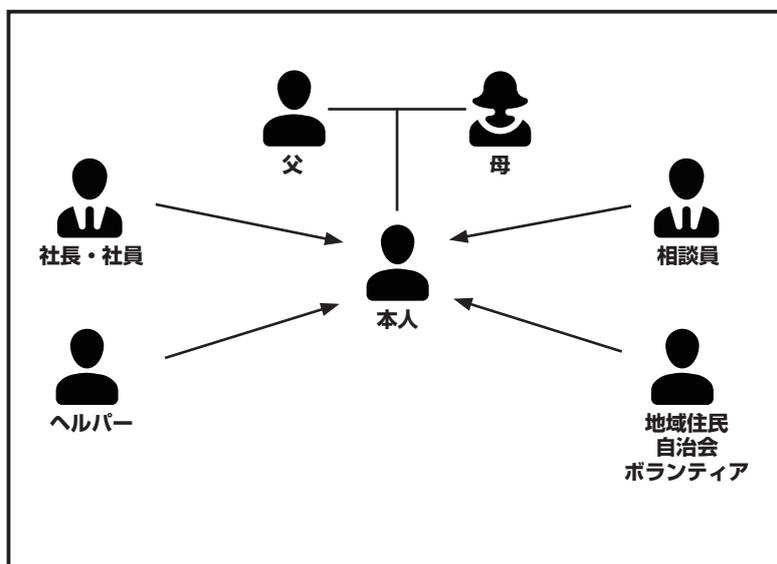
地域福祉を推進するためには、さまざまな関係機関と連携し、協働していく必要があります。これからも複雑多岐な困難事例に直面すると思いますが、一人で抱え込まず、関係者と連携し、地域全体で支援していく仕組みづくりの実践を目指しましょう。

## 事例 3 (社協CSW)

# 地域のサポート体制構築による 障がい者の方の自立支援

## 事例概要

本人は知的障がいではあるが、ある程度の判断はできることと、就労に関しての意欲もあり自信の将来を考える力も有している。両親と同居していたが、就労と同時に重度障害者多数雇用事業所で就労し生活を送っていた。しかし、自身の将来について考えると一般事業所で就労しながら自分ひとりで生活できる基盤をつくり実行したいという希望を持っていた。そのことを地域の相談事業所の相談員に相談したことがきっかけとなっている。また、両親が本人の賃金を使い込み、パチンコに費やしているという現状もあり、本人の了解のもと、担当相談員が金銭管理を行い、ヘルパーが定期訪問して担当相談員と連携し、自立へ向けてサポートしている。



## CSWとしての働きかけ

### 潜在的な生活・福祉課題の発掘

- 地域の会議の案内を前日に再度知らせるよう近隣住民にお願いしたり、地域活動に参加できるよう、体協役員にお願いした。

### 地域のネットワークを活用

- 勤務中は、社長・社員のサポートのお願いし、地域では、自治会長・福祉推進員・体協役員等の声掛け・見守りの構築を行った

### その他

- 一般事業所の社長に相談員とCSWで面談し、就労が確定となる。

## 成果・課題

---

見守り体制が構築でき、随時声掛けがされるようになった。地域の会合・スポーツ大会に積極的に参加されるようになり、今では、スポーツ大会に欠かせない存在になった。CSW・相談員との関係も良好で、地域で遭遇したさい、気軽に声掛けするようになり、ご本人が明るくなったことも確認している。

### CSWになったきっかけ

CSWの講習会がきっかけですが、私の場合CSWがかかわるケースは多くは、日常業務の延長上にあると感じています。様々な事例を課題解決に向けて導くには、私の経験が生かせるのではないかとの思いもあり、すんなりと入ることが出来ました。

---

### 良かったと思うこと

支援を受ける人が将来に向けた希望を持つことが出来、それを支援した人にとっても役に立てたという実感を持つ。支えられる人支える人、それぞれが喜びを感じることが出来るという場面に係われることが良かったと思います。

---

### 今後の目標

ひとつの事例ではなく、たくさんの事例にたずさわり、微力ではありますが、もっと人と人をつないでいき、それが将来大きな輪となって幸せな街づくりへとつなげる事が出来ればと考えています。

---

### 本格的な活動を目指す方への一言

支援することにより、暗かった顔がいつしか笑顔へと変わり、その笑顔を見て私も笑顔になる。ひとつの笑顔がたくさんの笑顔につながる。そのスタートが自分であると考えれば、そこには言うことの出来ないような嬉しさがあります。ぜひ、その嬉しさを実感してみてください。

## 事例 4 (社協CSW)

# 地域のネットワークを活用した 多問題家族への支援

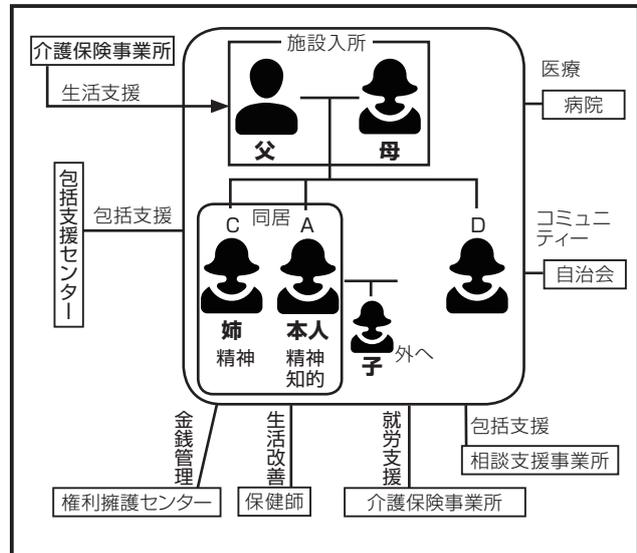
## 事例概要

世帯員は、本人（A:44歳）・本人の子（B:17歳）・本人の姉（C:47歳）の3人。Aの父（81歳）、母（69歳）は同市内の施設に入所している、Aの妹（D:41歳）は県内のM市に在住。A及びCは共に離婚し、Cの子（10歳）はI市の施設に入所。

Aは、精神障がい及び軽度の知的障がいがあり、Cは精神障がい者である。

この家庭は、ゴミ屋敷、虐待、近隣トラブル、お金使いが荒いなど多重の問題がある。また、A及びCは精神障がいを理由に就労する気はなく、それを見てきたBも生活リズムが乱れ、学校にも通いにくく、男関係のトラブルも発生した。

これを受けて多方面の支援が必要であり関係者及び関係機関のネットワークを強化し支援にあたることとした。



## CSWとしての働きかけ

### 潜在的な生活・福祉課題の発掘

- 民生児童委員及び保健師等の定期的な訪問により地域の異変は報告を受ける流れができています

### 地域のネットワークを活用

- Bの就労に向け地元の介護保険事業所に相談し、就労に繋げた
- 近隣住民及び自治会役員とのネットワークにより当家には自治会役員が当たらないような配慮に繋げた

### 新しいプラットフォームの設定

- 民生児童委員、包括支援センター、社協等の関係機関による支援会議の場を設け、情報共有の徹底を図った
- 障がいの理解を得るため近隣住民との話し合いの場をもった

### その他

- 障がいに関する相談等が増加傾向にあることから市内の相談支援事業所との連携により民生児童委員を対象とした研修会を定期的で開催している
- キーパーソンであるDを中心に話し合いを進めているが、Dに負担がかかりすぎないように関係者一同が意識した支援を行った

## 成果・課題

A及びAの両親に日常生活自立支援事業を導入した。また、ホームヘルプサービスを導入し、食生活の改善を図った。Cは、高校の留年も決定し、生活リズムの安定が見込まれないため、同町内の介護保険事業所の理解をいただき、アルバイトをさせてもらっている。Cの仕事ぶりから他の職員等からも評価を得ていて、Cも楽しく仕事をしている。近隣とのトラブル等については、Dの協力を得ながら地域の理解に繋げている。また、激しいトラブルが発生した場合には、社協主導により近隣住民との意見交換を行い、あわせて、A及びCと近隣住民の顔合わせによる解決を進めてきている。

一方で、食生活改善のために導入したホームヘルプサービスではあったが、ヘルパーとのトラブルが発生し、利用を取りやめることとなった。これにより今後は食生活の指導も必要となる。また、A及びCの就労意欲を高めるための支援やC単独の支援が必要となってきた。

## 事例5 (社協CSW)

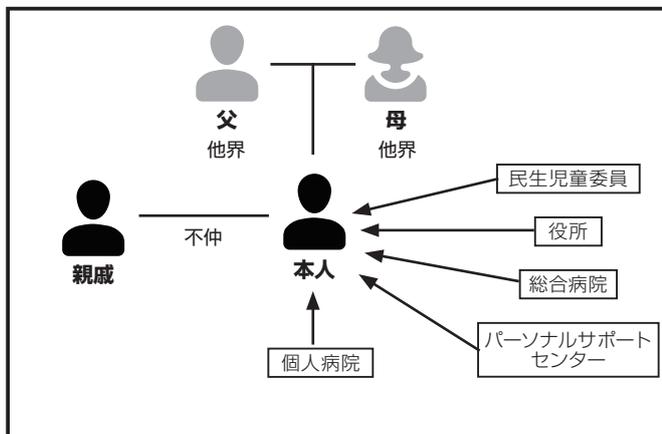
# 地域のネットワークを活用した ホームレス支援

## 事例概要

地域の民生児童委員さんから、不審な人が地域にいると相談があり、喫茶店・食堂でよく見かけるといふ報告の元、喫茶店・食堂の方に、来店されたら連絡をいただくようお願いする。後日、食堂から連絡があり、本人に会う。

地元で中学まで生活し、高校に進学せず都会に就職する。そこで、結婚し、離婚する。(子供なし)会社が倒産し、社宅暮らしであったため住む場所も追われ、郷里に戻ってくる。親は他界しており、親戚とは不仲。実家は親が他界した際に処分して、今はない。自分が暮らしていた地域に戻り、実家のあった近くの

親戚の家の蔵に自分の荷物があるから、その片づけをしたいと蔵に行っていたらしいが、真実はわからない。所持金は今まで貯めていたお金のみ(約6万円)ネットカフェで夜は寝ている状態。今後自分は市内で生活していきたい。心臓に不整脈があり。体調にも不安がある。仕事をインターネットで探しているが見つからない。



## CSWとしての働きかけ

### 地域のネットワークを活用

- 民生児童委員が地域の住民のがわかっているので、見たことのない人が地域を歩いていると気になり、動きが不振であったため、CSWに連絡がはいる。

### 新しいプラットフォームの設定

- パーソナルサポートセンターへつなぎ、履歴書の書き方・職探しをするが見つからず、生活保護にいたる。

### 個別の生活・福祉課題の普遍化

- 心臓に不整脈があり、就活をするが、難しく、結局、生活保護を受け、心臓にペースメーカーを入れ、市内に定住。

### その他

- 話をしっかり聞き、ゆっくり時間をかけて接することで信頼関係が出来た。
- 姿を見かけたら必ず声をかける。

## 成果・課題

心臓に不整脈があり、就職もうまくいかず、今後の生活が不安であったが、生活保護をうけることで、落ち着き、心臓にペースメーカーを入れることで、体も安定している。体調次第で、就活にチャレンジしようと考えている。

地域では、不審者が実は地域の出身者であったとわかり安心している。

## 事例 6 (社協CSW)

# 1人暮らしの認知症の方が地域で暮らすための支援

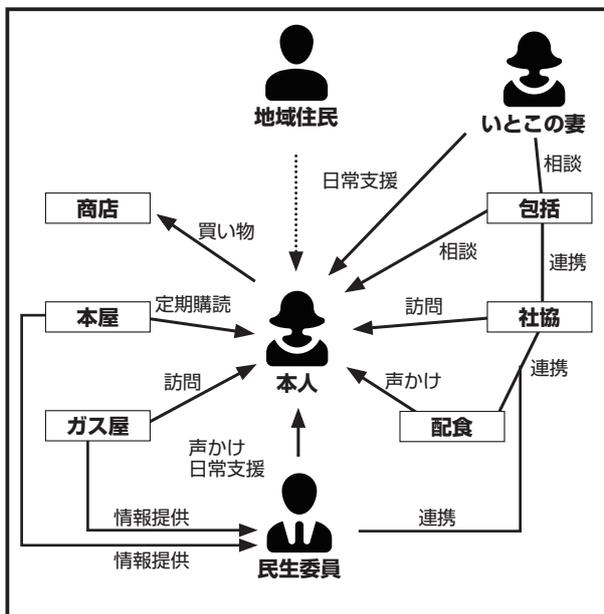
## 事例概要

7年前にUターンした。独身（既婚歴なし）83歳 女性

妹と弟は大阪にいますが、ほとんど付き合いがない。町内にはいとこ（亡）の妻がいるだけで頼れる人がいない。地域住民からはけむたがれている。もともと現住地で生活したことがないので、親しい友人もおらず近所付き合いなどもせず生活してきた。

ガス屋さんに使い方が分からないと何度も電話があるので様子がおかしいと民生委員に連絡があった。ガスをつけることもできず、調理をしている様子もない。買い物は近所に行くがパン、牛乳、うどんくらい。痩せており栄養状態が悪い。虫が家に入ってくると言って駆除剤を何本も買って家中にまいている。お金があちこちに置いてあり、通帳がどこにあるか分からない。引落しができず電話が止まっている。尿臭がきつく入浴してない様子。書類の管理ができず、理解もできていない。生活全般に支障をきたしている。

いとこの妻は気にかけてくれるが口調がきつく関係性は良好ではない。本人は詩吟が好きで話好き（話をしだすと止まらなくなり昔のことをしゃべり続ける。）週刊誌は定期購読（家まで持ってきてもらう）している。



## CSWとしての働きかけ

### 潜在的な生活・福祉課題の発掘

- 社協包摂会議にてケース会議を行う（構成員、ヘルパー職員、ディサービス職員、居宅ケアマネジャー、配食サービス担当、生活支援ハウス職員、社協地域担当）計5回
- 民生委員と連携し何かあった時の対応

### 地域のネットワークを活用

- 地域住民ボランティアによる配食時の声かけ、つながりをもつよう働きかけた
- 民生委員による声かけ支援協力、相談対応

### 新しいプラットフォームの設定

- 民生委員、近隣住民（親族）、包括、社協で支援について話し合いを行う

### その他

- 地域包括支援センターと連携し配食サービスの導入、生活支援ハウスへの入居支援

## 成果・課題

地域に潜在していた生活困窮者の支援をCSWだけの視点ではなく、各専門職の様々な視点からの意見をもらいながら連携をとりながらできた。

限られた地域資源を活用しながら在宅生活を支援してきたが、自分で困りごとに対して相談や判断ができない中、本人の身体機能精神状態の悪化によって緊急な対応が必要となり、生活支援ハウスへの入居となった。新たな環境に馴染めず混乱を招き、数日後、他の施設へ入所（1日で退所）、その後、精神科へ入院となった。関係機関や様々な職種と連携し検討会を設け支援したが、本人にとって落ち着いた環境をつくるができなかった。結果的には入院となったが、1人暮らしで親族もない認知症の方への関わりについて評価をし、今後活かせるようCSWだけではなく共有できた事は、一歩前進だったと思う。

## 事例 7 (施設CSW)

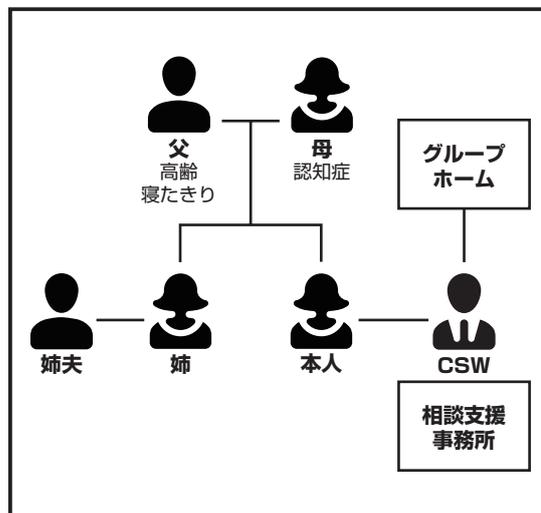
# 39年間の引きこもりの方への支援

## 事例概要

高校卒業後、就職したが人間関係が築けず1ヶ月程度で退職することを繰り返していた。22歳から家に引きこもり家族以外の誰とも会わない生活を始めた。24歳の時に医療保護入院を3カ月したが、病識がない為、継続受診とはならなかった。姉が熱心に本人を見ており、姉が代わりに受診していた。その間、保健所や病院、市役所の職員が訪問したが、事前に察知し、山へ逃亡して誰も姿を見ることは出来なかった。

57歳の時に医療保護入院となり、退院をきっかけにサポートセンターが介入し、毎月1回自宅へ訪問し、本人と信頼関係を構築した。少しずつ心を開いてくれるようになり、58歳からは月1回地域活動支援センターのレクリエーションに参加出来るようになった。その間も毎月の訪問を継続しており、61歳になり、グループホームへ入所して、生活介護へ通所したいと希望され、39年間引きこもっていた生活から脱却できた。

本人、家族共に今まで経験できなかった、人との関わりの中での充実した生活や楽しみを取り戻したいと希望されている。



## CSWとしての働きかけ

### 地域のネットワークを活用

- 地域活動支援センターのレクリエーションに参加(月1回)により、人と関わることの大切さ、楽しさを経験する。
- グループホーム入所と生活介護への通所

### その他

- 地域の祭りや行事に参加し、自分は地域社会の一員である実感を味わえる経験を提供する。
- 人生を楽しみたいという本人の希望に寄り添い、コンビニエンスストアで好きなものを買って食べるなど今までになかった楽しみを増やす関わり方を意識した。不安感が非常に強く、一歩踏み出すことに時間がかかるので、不安感に丁寧寄り添い、無理強いすることなく本人の自己決定を尊重した。

## 成果・課題

長年に渡り引きこもっていた結果、買い物や洋式トイレの使い方など新しいことに適応することが非常に困難で不安感が強かった為、ゆっくり何度でも同じことを繰り返し伝えた。

今までは実家の姉に頼りきりで自分では何もしようとされなかったが、グループホームで洗濯を職員と一緒に出来るようになった。自分から手伝ってくださいと言えるようになり、自発性が芽生えた。

日帰り旅行に挑戦することができた。

家族は一生このようなことはないと思っていたので、奇跡のようですよとっておられた。地域の仲間と職員がいれば、新しいことに挑戦しようと思える気持ちを持つことができた。地域活動支援センターで他の利用者と仲良く雑談できるようになり、自己主張ができるようになった。(月1回の利用時は、ずっと下を向いて座っており、誰とも話すことはできなかった。)

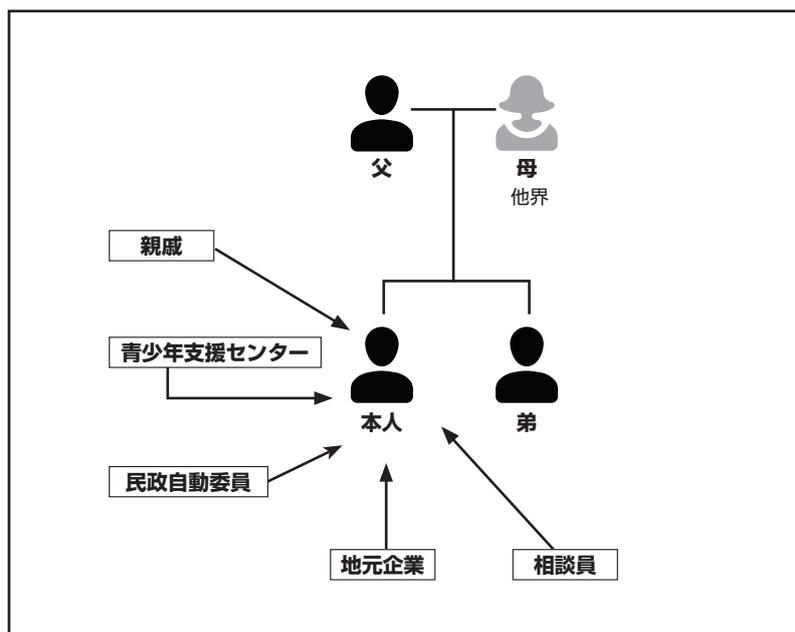
現在61歳だが、地域以外の施設への通所は困難と予想されるので、介護保険に移行する時が問題になると思われる。金銭管理、通院介助などほとんどのことを姉が担っているため、姉が高齢になり、本人の支援が難しくなったときにどうするか課題が残っている。

## 事例 8 (社協CSW)

# 20年間の引きこもり生活から 企業への就職支援

## 事例概要

中学生の時にいじめを受けて不登校になり、卒業はできたが、高校にはいかず引きこもりになった。母親がかくまっていたが、その母親が他界し葬儀での行動があまりにも不審であったため、親戚が本人に問いかけ、不登校から20年以上家に引きこもり他人との接触がなく生活してきた現状があきらかになった。親戚からの相談で、障がいのある子の支援をしてほしいとのことから、同居家族・親戚・相談事業所の相談員・CSWで話し合いを行った後、支援を進める中、自分は障がい者ではないという本人からの発言があり、一般事業所での就労に向けて支援を始めた。



## CSWとしての働きかけ

### 新しいサービスの開発

- 地元の小さな企業に青少年支援センターの就労体験事業活用後、企業の見習い社員として就労(見習い制度)

### 地域のネットワークを活用

- パーソナルサポートセンター・青少年支援センター等、公の施設を活用し、家族以外の人と関わる術を体験。

### 個別の生活・福祉課題の普遍化

- 家事をしたことがなかったが、就労先のスタッフによる簡単な家事の指導・あいさつの指導

## 成果・課題

今まで、家の中だけの行動だったが、外出できるようになった。知り合いと会うと、あいさつができるようになった。笑顔も出るようになった。包丁が使えるようになった。自分に必要なものがあると自分で買い物ができるようになった。少しではあるが、自分の意志を他人に伝えることができるようになった。

## 事例 9 (社協CSW)

# 地域の見守りネットワークを 中心とした支援

## 事例概要

Aさん(80歳代 女性 独居)は、地元で生まれ育つが、幼少期に両親とともに大阪へ転居。以後、大阪で生活され、結婚し、一人娘を授かる。

娘の独立と夫の定年等を機に、町内に暮らすの親族のすすめで15年ほど前にUターンし、親族の管理してきた古い一軒家に、夫婦水入らずで暮らしはじめる。

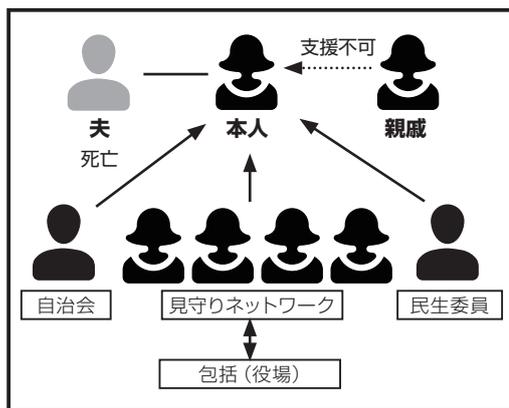
しかし、大阪でのライフスタイルをそのままに、夫婦ともに人的交流もほとんどなく、1日のほとんどを家の中で過ごされており、近隣の住民も「ほとんど顔を見たことがない」ともっぱらの評判で、たまに見かけても、夫婦ともに警戒心が強いのか、いつも眉間にしわがよって、近寄りたがいない存在であった。

自治会にも未加入で、親族も改善を促すが、地元の常識がなかなか受け入れられない様子で困惑し、よけいに自らの殻に閉じこもるようになっていった。

10年ほど前には夫が他界し、以来、Aさんは一人暮らしだが、近隣等との関係は特に変化はなく、掃除や洗濯、調理も買い物等もなんとか行っているようだが、整容は以前に比べ乱れている様子が近所でも確認されるようになっていた。

地元の親戚も80歳代一人暮らしで、現在は介護サービス等を利用しているため、Aさんとの普段の往来はほとんどなくなっている。

このままの状態が続くと、必要な福祉サービスの利用は勿論、町の情報などからも孤立し、生活課題が拡大していくことが想定されるため、自治会長から社会福祉協議会のCSWに連絡が入り、地域の見守りネットワークを中心とした支援を開始することとなった。



## CSWとしての働きかけ

### 潜在的な生活・福祉課題の発掘

- 地域の見守りネットワークを中心に、まずはラポール形成を主眼に、日頃のあいさつから展開
- 次第に整容も整いだし、掃除、買い物、ゴミ出しにしんどさがあり、今後の生活への不安を吐露されるようになる現在はなんとかこなしている)

### 地域のネットワークを活用

- 福祉サービス利用の必要性は勿論、地域の支援ネットワークとの双方向支援を視野に入れておく必要があると考え、まずは地域の見守りネットワークを基軸として展開
- Aさんの体調が優れないときなどは、見守りネットワークの機能を活用し、買い物代行やゴミ出し等の支援も実施

### 新しいプラットフォームの設定

- 自治会や民生児童委員とも定期的に情報交換を行うとともに、包括支援センターとも情報共有し、福祉サービスの利用が必要になったときなど、即座に対応できるようにした。

## 成果・課題

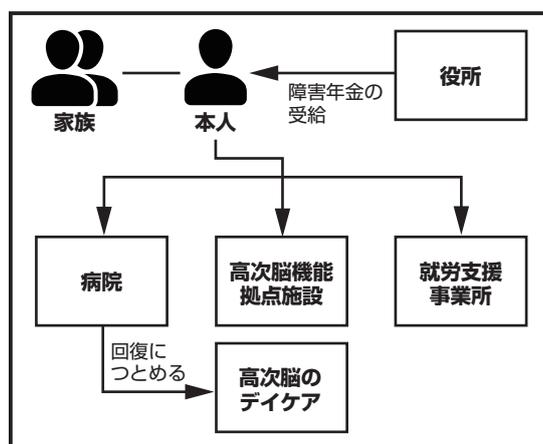
- ・複数回の訪問により、「安否確認・声掛け訪問活動」を受け入れていただくこととなった。
- ・活動を通じて徐々に信頼関係を構築することができ、対象者の不安(心疾患等を患っており、夫を亡くし、唯一の拠りどころであった親戚も高齢のためほとんど往来がなく、孤立感を強く持っていた)把握・解消につながり、心に潤いのある生活が送れるようになった。
- ・外出(散歩)の機会も増え、整容もきちんとされるようになった。
- ・心身の状態も好調が持続しているようで、笑顔で近隣住民にも自ら進んで挨拶をされるようになり、顔見知りの数も徐々に増えるなど、積極性も見られるようになってきた。
- ・平成26年9月末、数日間、電気が点きっぱなしになっていることを不審に思った訪問員が訪問日とは別に対象者自宅を訪問する。しかし、自宅には施錠がされており、呼びかけにも反応がない。同日、万が一を想定して親戚や自治会役員、消防職員、警察官とともに再度訪問。トイレ窓の鍵が開いており、その窓から屋内をのぞくと、トイレ先廊下で対象者が倒れているのを発見(死後5日)。
- ・こうした一連の過程の中で、福祉関係機関だけでなく、消防・警察ともに小地域福祉活動の果たす役割を共有することができ、今後のネットワークづくりのきっかけとなった。

## 事例 10 (施設CSW)

# 医療・家族会との連携による 高次脳機能障害の方への支援

## 事例概要

30代前半で、交通事故にて、意識不明となり集中治療室で治療開始、一命をとりとめ、意識が戻る。事故により、外傷性くも膜下出血・胸部打撲・顔面打撲・脾臓より出血・脳圧上昇発症・意識が戻った時点で、高次脳機能障害の症状が出現する。家族への暴言、作話、妄想が出る。数日後、記憶障害も快復したころ、症状も落ち着いてきた。それと同時に親子関係も修復してきた。この時点で、サポートセンターに相談あり、介入開始となる。どう社会復帰につなげていくのか、彼（当事者）に寄り添った、支援体制の構築に取り組んできた。支援を続ける中で、彼も家族も、障がいを受容し、新しい人生に向かって歩き出された。



## CSWとしての働きかけ

### 新しいサービスの開発

- より質の高いサービスが利用できるよう、今後は高次脳障害の啓発、啓蒙を通じて、さらなる学習の機会を設ける。

### 地域のネットワークを活用

- 就労支援の整備、障がい児放課後デイサービス職員として雇用。
- 医療や高次脳家族会との連携を密に行った。高次脳デイケアを利用し、ゆっくりと回復期を待った。

### 新しいプラットフォームの設定

- 病院・就労支援事業所・高次脳拠点施設等との連携体制づくり

### 個別の生活・福祉課題の普遍化

- 家族との連携と高次脳機能障害の家族会の促した。
- 介護保険事業者や福祉施設の事業所などへも啓発、啓蒙の学習会も開催されるようになった。

## 成果・課題

医療との連携が密になり、ゆっくりと、あらゆることにチャレンジすることで、新しい人生に向かって歩き始めたことは、CSWとして良い出会いであったと思う。自身の障がいについて啓発・啓蒙活動を行うなど自身の障がいの受容はもちろんだが、就労支援にも繋がっている。今後は1人暮らしに向けて支援計画を作成予定。

## 事例 11 (社協CSW)

# 地域住民を巻き込め！ ～ゴミ屋敷は都会の問題じゃなかった～

## 事例内容

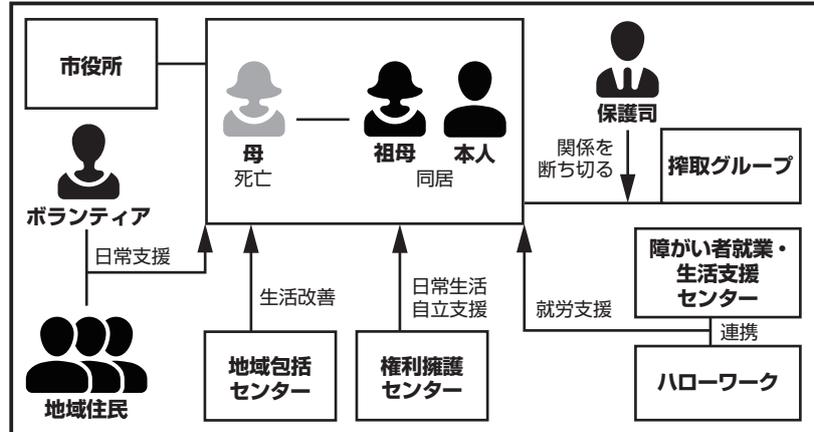
知的に障がいのある本人、母親、祖母の3人暮らしであり、普段からパチンコなどのギャンブルに通いつめ、近隣住民との関係は薄かった。

社会福祉協議会へ「お金がない、ガスが止まってしまう、電気が止まる、家賃が支払えない」と相談があり、収支状況の把握を行うが、世帯収入から支出状況を見ると生活ができていると感じたため、生活実態の把握をするため訪問を実施した。

自宅には、ネコの糞尿やごみの中に祖母が寝ている状態であり、現金もない状態であったため、緊急的に食料の支援で急場をしのいだ。後日地域包括の職員と同行訪問して、栄養改善、生活改善のため介護サービスの利用へつなげた。

本人と母親には収支の確認を行うため家計支援を行うと、ギャンブルや第三者からの搾取によって困窮していることが明らかになったため、権利擁護センターの職員と同行し日常生活自立支援事業へつなげた。

また、本人へ関係している機関を聞いてみると意外と多いことが分かり、市役所を中心に支援会議を複数回開催し、課題を整理して、問題を解決して行きました。



## CSWとしての働きかけ

### 潜在的な生活・福祉課題の発掘

- 家計実態を明らかにしていき、本人が気付かなかった収支状況を明らかにし、生活再建のために根気強く説明をして、納得してもらい日常生活自立支援事業へつなげた。
- また、安定した収入を得るため、そして規則正しい生活リズムにするために、障がい者就業・生活支援センターやハローワークと連携しA型就労継続支援事業所への就職へつなげた。

### 新しいサービスの開発

- いままで社会福祉協議会が行っていた食糧支援が「家でできた野菜だけん 食べえだわ。」とか「知り合いの農家から、安値で米をわけてあげ～わ。」など地域住民からの支援も広がりにつなげた。

### 地域のネットワークを活用

- 本人、地域包括職員、保護司、ボランティア、CSWで住居の片づけを実施したところ、ボランティアから「こういう家は都会だけの話だと思っていました。」と困窮問題はテレビの世界ではないことを理解された。

### 個別の生活・福祉課題の普遍化

- お金をだまし取って、本人から家賃を支払わせかかまっているグループとの関係を断ちたいとの意思を確認し、本人と保護観察官、CSWでアパートから荷物を引き上げて、関係を断ち切ることに成功した。

### その他

- 玄関ドアのガラスが割れ、寒い時期に冷気が入り暖房もない生活をしていたため、歳末たすけあい運動で急遽、窓ガラスの修理をした。

## 成果・課題

母親に先立たれ一人での生活を送ることとなったが、本人の家事能力が低いことで自立した生活ができにくい状態となり、家事が行えるように自立の援助ができていないこと。また、人懐っこい性格から悪いことに再度巻き込まれてしまうことが考えられるが、本人自ら良い人間関係を構築することは苦手なため、キーとなる友人や仕事仲間をつくっていくことが課題である。

成果としては、本人との信頼関係を構築し、関係者と連携を図ることで課題が少しずつ解決できていったことや支援の輪が広がってきたことであると考えます。

## 編集後記

---

島根県社会福祉協議会では、地域福祉の実践において必要なことは、コミュニティソーシャルワーク機能を理解し、そのことに関する技術、方法を体得することであると考え、平成18年から「コミュニティソーシャルワーク実践者養成研修会」を行ってきました。

この研修会の修了者は、社会福祉協議会のみならず、多様な機関・団体に所属していますが、学んだコミュニティソーシャルワークの技法を実務に生かしていくことが課題となっています。

そこで、この度、今日的な生活・福祉課題の解決に向けたコミュニティソーシャルワーク実践の具体的展開を掲載した事例集を刊行することにいたしました。

この事例集が、コミュニティソーシャルワーク実践者のスキルアップと多様な福祉関係者における理解促進の一助となれば幸いです。

平成27年3月  
島根県社会福祉協議会（K）



